旅に出る人びと、村を去る人びと  貞享三年 他国出国者の記録から

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>長谷川 裕子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>福井大学附属図書館報 図書館日々報</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>ヘルピューロ</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>役所</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2017年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10098/10119">http://hdl.handle.net/10098/10119</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
福井大学附属図書館所蔵「小島家文書」を読む（4）

旅に出る人びと、村を去る人びと—貞享2（1685）年、他国出國者の記録から—

教育学部社会系教育講座准教授 長谷川 裕 子

はせがわ・やすこ

江戸時代の半ば、17世紀も終わりの頃になると、
死と隣り合わせの世界から解放された人びとは、百
姓の「家」の相対的安定化を背景に、現代社会に生
きるわれわれと同じように「自分のため」の旅に出
るようになる。もちろん、江戸時代以前にも、商人
や宗教者、さらには百姓までもが、生業や生活に必
要な物資を調達するために諸国を巡っていたし、ま
た村で食えない人びとが、居村から「欠け落ち」し
て移住することも頻繁にみられた。しかし、幕藩権
力によって百姓の欠け落ちへの対策が講じられ、村
への定住も進みつつあった江戸時代の半ばの頃にな
ると、経済的に余裕のついてきた百姓を中心に、多
くの人びとが短期間の移動を行うようになる。福井
大学附属図書館に所蔵されている「小島家文書」に
は、そうした江戸時代の人びとの移動に関する文書
が数多く残されている。これらの文書から、江戸時
代の人びととの生活や娯楽の世界をのぞいてみよう。

「小島家文書」を伝えた小島氏は、代々「野中組」
の頭として、小島氏の居城する野中村を中心とし
た周辺18ヶ村の取りまとめ役を担っていた。そ
のため、野中組に属する村の人びとがどこか他国へ移
動する場合には、各村の庄屋・長百姓等を通じて小
島氏のところに届けがなされることが多い。なかで
も、「五年年他国出候者証文留書」（以下、「留書」
と略す）には、貞享2（1685）年3月から同3年7
月までに越前国外に一時的に出国した人びとの移動
届がまとめて綴られている（3204号文書。以下「小
島家文書」については目録番号のみを示す）。綴ら
れた移動届はどれも概ね同じ様式で、移動する人の

貞享2（1685）年
「丑之年他国出候者証文留嘆」（No.3204）

名前・行き先・期間が記され、もし他国にそのまま
居留し、または旅先で病気になって居村に帰りない
場合には、庄屋・長百姓と相談の上、請人（保証人）
となっている村の者が現地まで迎えに行くことが誓
約されている。

「留書」に記されている旅の目的は、大きく二つ
に分けられる。商売あるいは生業のための旅か、ま
たは参詣や湯治など娯楽のための旅か、である。前者には、越中（富山県）・能登（石川県）・越後（新潟県）に期間およそ1〜2ヶ月で「駒買」「馬買」に行った中村と玉山の百姓が確認できる。なかでも中村の僧平は、貞享2年3月と5月、同3年3月に越中・能登へ買い付けに行っていることから、馬を扱う商人であったと推測できる。戦国時代においては、武士階級だけではなく、耕作や荷物の運搬のため、百姓が馬を役使する機会も拡大し、その需要は拡大していた。これらの馬は、他国からもたらされるものであろうが、馬を多く支障する下村の百姓が他国に馬を売りに行っているように（1512）、越前から他国に流出することもあったようである。その他、商売のために大坂へ行った商人や、「はかせ舟」を運ぶに乗って松前まで下った水主の移動届も「留書」には残されている。

一方、後者は、白山・立山や京都への参詣、そして山中温泉での湯治を目的とした旅の届けが出されている。社寺参詣については、貞享2年7月18日から晦日の日程で、宮村・中村の百姓4人のグループと、藤沢村の百姓2人のグループが白山詣を申請しているが、両グループとも村を出発して加賀に入り、自山に登ったあと越中立山まで足を伸ばしている。いまだも北陸の観光地として人気の高い立山は、江戸時代の人びとにとって娯楽の場であったことがわかる。また、山中温泉を訪れた瀬村の百姓の旅の目的は病気療養であったが、後述するように、村の女性も多く山中や加賀温泉を訪れていることから、いつの時代も変わらず、温泉めぐりは人びとにとって数少ない感しのスポットであったことがうかがえよう。さらに、京都への旅のほとんどは本願寺である。17世紀の終わり頃には、百姓の社寺参詣が流行するが、なかでも人気が高かったのが伊勢神宮と本願寺であった。浄土真宗の寺院が多い越前で、しかも勝山藩が「伊勢や本願寺に参詣したい者は遠慮なく庄屋に願い出て関所通行手形を申請し、参詣しない」と推奨したこともあって、伊勢神宮や本願寺への参詣が高まっていったのである（『福井県史』通史編編4近世2）。

「留書」にみられる旅行者はすべて男性であったように、当時男性が他国へ旅に出ることは、それほど厳しい規制はかけられていなかった。貞享3年1月に福井藩が出した文書には、「商いや参宮・湯治、その他の用事で他国へ行く者は、村庄屋に断りを入れ、組頭（大庄屋）のところで吟味した上で、だいたいの帰国のお延べを提出してから出国せよ』（3503）と定められている。「留書」に記された文書は、まさにこの福井藩の法度にみられる手続を踏んだ移動届であったといえる。なお、毛利藩では万治4（1661）年以降は町年寄や庄屋目代などの手形があれば出国してよいと定められ、岡山藩では元禄3（1690）年に在来手形の種類が示されているように、この届けを受けた野中組の組頭は、旅人に「往来自行」なるものを発行したと考えられるが、残念ながら「小島家文書」のなかには残されていない。病気の旅人を宿場から半強制的に追放することを禁じ、病気を宿場で世話して国元への連絡を取ることを義務づけた元禄1（1668）年発令の江戸幕府の「生類懸命」政策を受けて、往来手形は旅人の保護、救済のため、幕府や藩主の主導で所定の様式に整備されていくが、それより以前から地域社会においては、旅人の身元を保証する証明書として携帯されていたという（柴田純「江戸のパスポート」）。福井藩の法度や「留書」の移動届にも「旅先に居留したり病気になったりした者は村として呼び返す」と定められていることから、野中組の村人たちも、何かの身元証明書を携帯して旅に出ていたことが予想されるよう。

短期間であれば、旅行も比較的容易だった江戸時代の男性に比べて、女性の旅の場合には、幕府の関所や藩の役所番所を通過するための手形を発行してもらうわけではないかった。これは、女性を「留物」としてその通行を取り締まることにより、百姓の領内への流出を防ごうとした幕藩国家の政策によるものであったという（深井甚三『江戸の旅人たち』）。江戸小島文書には、福井藩が設置していた「板取」の口留番所を通過して旅した女性たちの「通行手形」も数多く残されている。

貞享3年間3月、福井藩の領地の半分が召し上げ
られた「貞享大名」により、野中組は福井藩領から幕府領に編入された。そのため、貞享3（1688）年8月6日、清家村の尼吉しゆは、板取の口留番所を通過する手形を、当時勝浦で置かれていた幕府領代官陣屋から発行してもらうために、庄屋を詐称して組頭に申請している（4296）。その目的は、伊勢神宮への参詣であった。当時、板取の口留番所は福井藩の管轄であったため、幕府領下の女性が板取を通る場合には、幕府領代官所から福井藩の町奉行所へ届けて出て、町奉行所から手形を発行してもらう手続が必要であった（『御国他国諸事之部』、「松平文庫」）。尼吉しゆの申請書は、その第一段階である村から組頭への申請である。その後、別の事例ではあるが、村からの申請書に添えて、組頭から幕府領代官へ申請書が提出され（1504・1622・1942・2327）、最終的に代官所から福井藩町奉行に申請が上げられたことが確認できる（1409・1547）。その手続を経て、ようやく女性への通行手形が発行されたのである。

この申請書には、女性の年齢や髪型（剃髪か否か）、村名、家主との関係、そして旅の目的が明記されている。女性の一人旅もみられるが、たいていは20代から60代の女性2人以上、多くは8人程度のゲループで、伊勢神宮や本願寺への参詣、あるいは山中温泉への湯治を目的に旅していた（本川幹男『福井藩口留番所と女性の旅』、「福井県史研究」15号）。特に伊勢参詣は、鎌倉時代以来、貴族や武士を中心に流行し、室町時代には領主を通過して領内の百姓のあいだに広まっていったという。しかし当時は、人びとが勝手に社寺にお参りにけるわけではなく、参詣する際には、「御師」と呼ばれる案内者が参詣者を社寺に誘導し、祈祷や宿泊などの世話をすることになっていた。御師は今でいうところのツアーコンダクターのような役割をする者であるが、特に中世以来、みずから諸国へ出向いて巡礼を集め、参詣を促していた伊勢の御師は、近世になるとその人数を著しく増やして精力的に諸国を巡り、伊勢参詣を急速に発達させていく。清家村の尼吉も、こうした流行に乗っての参詣だったのかもしれない。

しかし一方で、元禄期には村を離れて都市に向かった人たちも大勢いた。元禄11（1698）年2月、今市村の市兵衛の母は、十年以上前に江戸に移住し、湯島天神近くの商人の店に居住している市兵衛に養ってもらうため、幕府が東海道に立てた遠江（静岡県）の今切関（新居関所）の通交手形を組頭に申請している（1588）。市兵衛が江戸へ移住した理由は定かではないが、元禄13（1700）年3月3日の玉江村長兵衛の証文には、「身前隠り成らず」、つまり困窮によって「江戸へかせぎ」に向かい、舟町縄屋の店子である四五衛門のところに居住していると書かれている（2041）。元禄期は、村で食えない百姓が、多く農村から都市部へ流入し、都市下層民が増大した時期といわれているが、それは越前でも例外ではなかったようである。経済的に比較的安定した人びとが旅を楽しむ時代になっても、いまだすべての人が困窮から解放されはなく、逆に経済格差の拡大が進んでいたのである。現代の日本も同様であるが、人びとの貧困と格差は、江戸時代の大きな社会問題でもあったといえよう。